
Another winter break

Proof

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Another winter break

【Nコード】

N5863G

【作者名】

Proof

【あらすじ】

冬休み最後の日、クリスマスにフラれた高校1年生『向坂光』は親父が作った変なジュースを飲んだら2ヶ月前にタイムスリップしていた！！そうしてもう1度告白することを決意する。

12/25 (前書き)

皆さんこの物語は11月25日から12月25日までが
冬休みという少し変な設定ですが、
あまり気にせずに読んでください。

人は誰でも1度は過去に戻れたらと思うことがあるだろう。
俺は今がそうだ。

俺は今日、好きだった女の子にフラれた。
人生初の告白だった。

自信はあった。

今日は冬休みの最後の日にしてクリスマス。
仲よくなったのは最近のことだけど、デートに誘ったらokしてく
れたからだ。

こんなことなら告白なんかしないで友達でいたかった。
友達としてでもいいから『あの子』と一緒にいたかった。
ずっと一緒にいたかった。

家に帰ったらすぐに部屋にこもった。

理由は簡単だこんなに惨めな俺を誰にも見せたくなかったからだ。
まあ、今この家には俺しか居ない。

俺の親父はすごく変わっている。

働きもしないで変な研究ばかりしている。

そのせいで母さんが妹を連れて出て行った。

その親父は地下室にこもって何か実験しているのだろう。
そんなことを考えていると、睡魔に襲われ俺の意識はリアルと切断
され

夢の世界に飛んで行った。

次の日の朝、起きると俺の机の上に
変なジュースがあった。

エメラルドグリーンのジュースでドロドロしてそうだ・・・

親父は時たま俺の部屋に実験してできた
得体のしれないものをよく俺の部屋に置いてゆく。

いつものは決して手を出さないが、なぜか今日は飲む気になった。
きつとフラれたせいで気が変になっていたんだろう。

それに今日から始業式だ。

気合いを入れていかなければいけない。

俺は薬を一気に飲み干した。

『な・・・なんでだよ・・・?』

誰かが話している。でも誰が話しているかは分からない。

『俺のどこがダメなんだよ・・・?』

『なあ・・・答えてくれよ・・・』

『・・・ゴメン・・・』

1人が何処かに行った。

残された男がこっちを見た。

そこで夢の世界とのリンクが切れ、リアルに引き戻された。

天井が見える。

俺の部屋の天井だ。

あたりを見回すと昨日飲んだジュースがある、昨日は気がつかなかったが

ラベルに小さな文字で【Movement medicine between time-spaces】と書いてあった。

『時空間移動剤?なんだこりゃ?これを飲んだらタイムスリップでもできるってのか?』

馬鹿らしいと思えば壁を見上げると

時計があつた。

【9：21】

9時21分？

今度はケータイで時間を見た。

『遅刻だあああ〜』

俺は飛び起きた。

そしてすぐに制服に着替えた。

そして階段を飛び降り玄関に置いてある空のカバンをとり

家を飛び出した。

外は昨日とはうって変わって雪1つ積もっていない。

駅に着くまでに10分かかり、それから学校に一番近い駅まで8分かかった。

時間をみると【9時51分】

あいにく今日は始業式なので1時間目はロングホームルーム。

そんなにお咎めは喰らわないであろう。

そんなことを考えながら走っていると、俺が通っている校舎が見えてきた。

今、俺は教室のドアの前に居る。

そしてその先には昨日、俺のことを振った女の子【彩咲 天音】

ここは誠心誠意謝ろう。そうすれば何とか許してもらえらるだろう。

俺は勢いよくドアを開けた。そして、すぐに

『新学期早々遅刻してすみませんでした。』

向坂 光 ただいま到着いたしました！』

そして最後に担任に敬礼する。

クラスにどつと笑いが起こる。
それを担任の【朝日 祐樹】がなだめる。

すると担任はため息を吐きながら

『光・・・お前は昔から変だったかとうとう頭まで変になったか』
朝日は間をおいて言った。

『新学期は再来月の26日だ、まだ冬休みにもなってないぞ』

一瞬、朝日が何を言っているのか分からなかった。

だって冬休みは昨日で終わったはずだ・・・

俺は昨日のクリスマスにフラのを覚えている。

それが何よりの証拠だ。

だが黒板に書いてあることがそれが真実であると言っている。

『10月19日』

俺はあわててケータイを取り出して見るが、

やはり『10月19日』になっている、さっき見た時には気がつか
なかった。

その時あることに気がついた。

12月にあるはずの雪が朝には全くなかった。

たった1日ですべてとけ切ることはありえない。

俺はその時すべてを悟った

『俺の机に置いてあったあのジュースを飲んだせいで

俺・・・タイムスリップしちゃまったんだあああ』

『じゃあこれで終わりだ。皆気をつけて帰れよ。そうだ明日は朝から席替えをするから遅刻するなよ』

その言葉を最後に朝日が教室を出て行った。

その後を続くように、1人また1人と帰って行った。

今、教室には光と1人の女の女の子しか居ない。

光が好きで告白したがフラれた子である。

『あれ？向坂は帰らないの？』

【岡崎 みこと】160センチぐらいの伸長でショートカットで茶色のメツシュを入れていてとても可愛い子だ。

『あつ・・・い・今帰るろうとしてたんだろ』

突然声をかけられ言葉が滅茶苦茶になってしまった。

顔がカァーと赤くなっているのが自分でもわかる。

すると、みことは、くすつと笑った。

『今日の岡崎すごく面白いねw』

みことの笑顔を見たらもつと顔が赤くなってしまった。

みことの笑顔を見るとすごく幸せな気持ちになった。だけど、同時になぜか悲しくなった。

『・・・なあ、岡崎』

『ん？どうしたの？』

『変なこと聞いても良いかな？』

『変なこと？』

『もし・・・好きな子にフラれて、でもまだその子のことが好きな時に、もう1度告白するチャンスがあったら岡崎ならもう1度告白』

するか?』

みことは不思議そうな顔をして答えた。

『すると思うよ・・・だって好きなんですよ?せっかくチャンスがあるのにそれを使わないなんて勿体ないよ』

『それに・・・もし告白しなかったらきつと後悔するよ』

俺はたぶんもう1度みことに告白すると思う。

それからしばらくの間みこととは他愛もない話でもりあがった。もう外は真っ暗になっている。

『もうこんなに暗くなっちゃった・・・私たちこんな風に話すの初めてだね』

ちがうよ

『向坂の話面白かったよ』

名前で呼んでよ。いつもみたいに笑って名前で

呼んでよ

『それじゃもう帰るね』

一緒に帰ろうって言ってよ。ねえ、みこと・・・

去り際にみことは思い出したかのように言った。

『明日、席が隣になったら宜しくね』

そう言って帰って行った。

光は分かっていた。明日の席替えで、みことと隣になる事を。そして2人の中はそれから急激に縮まってい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5863g/>

Another winter break

2010年12月4日04時50分発行